

# 社報 御霊本宮

第75号

発行者  
御霊神社本宮  
宮司 藤井利夫  
五條市霊安寺町  
0747-23-0178

発行日  
令和3年  
4月1日

## 流し雛

毎年、四月第一日曜日に、南阿田町で「流し雛」の行事が営まれます。流し雛は、罪穢れを人形に託して流す「祓」の行事です。

古代中国では、水上に觴を流して解除する風習がありました。陰暦三月初めの巳の日に行われたことから「上巳節」と呼ばれていました。

これが日本に伝わり、平安時代には朝廷の年中行事として曲水の宴が行われるようになりました。曲水の宴という、盃が流れてくるまでに一句詠むという公家や貴族の遊びですが、もともとは清祓のためのものでした。昔から季節や物事の節目には災いをもたらす邪気が入りやすいと考えられていたため、川の水に心身の穢れ



を流して厄を祓う行事だったのです。

日本でも古くから「禊」や「祓」の思想、「形代」という身代わり信仰がありました。それが上巳節と結びつき、上巳の節句とし、て日本独自の文化として定着していきました。そのひとつが「流し雛」です。

南阿田では、大豆を頭にした男女一対の紙人形を作り、竹の皮で作った舟にのせ吉野川に流します。流す前には子どもが願いの文の奏上を行います。人形や舟は他の地域と異なり独特のものです。また、子どもが参加する行事として伝え残されています。

## ひなまつり

ひなまつりは、江戸時代になって、

幕府が定めた「五節句」により、民間の行事として広まりました。五節句とは、人日（正月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）の五つの節句をいいます。

江戸時代、「上巳の節句」が女の子の節句に定められると、財力のある商人が競い合うように絢爛豪華な雛人形を誂えるようになり、立派な雛人形を飾るようになりました。これが現在の「ひなまつり」の起源です。

「節」というのは季節の変わり目のことですが、日本では節の日にお供えをすることから「節句」と呼ぶようになりしました。人日は七草、上巳は桃花、端午は菖蒲、七夕は竹（笹）、重陽は菊というように、季節の旬の植物から生命力をもらい邪気を祓うという意味があります。

## 宇智郡 狛犬めぐり

野原西 御霊神社

参道入口に、天保八年（一八三七）に奉納された一対の狛犬があります。狛犬の表情は、優しく、他の神社の狛犬のように睨み付けているように見えません。尾は団扇型で、耳は垂れ、一般的な狛犬と思っていると、大きな特徴を発見しました。

左の写真をよく見てください。阿形の狛犬の左脚には、かわいい子獅子がいます。頭を上向きにして、脚に必死にしがみついているようです。

なんとも微笑ましく感じます。狛犬の表情が優しく見えるのは、子獅子がいるからでしょうか。



# 春の悔過

弘仁七年（八一六）十月二十三日、太政官符が下されました。その内容は、「靈安寺料として稻四千束を出奉することを右大臣が宣する。この寺は造営されて久しく、伽藍の名前はあるが加持祈祷は行われていない。そこで毎年、税より四千束を割いて、その利息で春秋悔過ならびに修理料に充てる。」というものです。

ここに出てくる「春秋悔過」とは、井上内親王の慰霊を行う祭りのこといかみで、春は命日の四月二十七日に行われていました。現在は四月第四日曜日に行われ、「太々神楽祭」という名称になっています。秋の悔過は、太政官符が出された十月二十三日に行われる秋祭りです。

この四月、十月は旧暦ですから、新暦では五月と十一月ということになります。新暦においても四月、十月に祭りを行っています。

春の悔過では、二年に一度（西暦偶数年）大餅まきが行われます。その量は三石五斗（約五二五kg）にもなりまき台の下にいる人は、粉で真っ白になつてしまいます。しかし、餅の粉を浴びた人は、清め祓われるとされています。

昨年は残念ながらコロナの関係で中止となりました。ワクチン接種が今年度中に全国民が接種されれば、来年度の太々神楽祭は実施できるものと考えています。来年は四月日（日）午後三時に餅まきを予定しています。ぜひ、皆様お越しください。なお、餅まきの際にはヘルメット着用でお越しください。（笑）

## 井上内親王の御園

本社の北東、歩いて五分ほどのところに日吉神社があります。ここは地域の人しか知らない桜の名所です。この日吉神社には、小社殿が二社並んで

ます。向かつて右が日吉神社で、山をおおよまづのみこと司る大山祇命が祀られています。向かつて左は御霊神社で井上内親王が祀られています。なぜここに井上内親王が祀られているのでしょうか。

ここは御園跡みそのと云い伝えられ、井上内親王が花を育てたところとされています。当時は金剛山を眺めることができる風景の良いところだったに違いありません。いろんな草花に囲まれて、井上内親王は何を思い、考えていたのでしょうか。



八百万の神々

## 月読命

禊いざなぎのかみで伊耶那伎神が右目を洗ったときに出現しました。天照大御神や須佐之男命とともに「三貴神」と呼ばれます。月読命は、伊耶那伎命から「夜の食国を知らせ」と命ぜられています。

日本書紀では次のような記述があります。月読命の訪問を受けた保食神うけもちのかみは、口から食物を出してもてなそうとしました。これを見た月読命は「けがらわしい」と怒り、保食神を剣で殺してしまいます。保食神の死体からは牛馬や蚕、稻などが生れ、これが穀物の起源となりました。天照大神は月読命を「汝悪しき神なり」と怒り、それ以来、天照大神（太陽）と月読命（月）は離れて住むようになり、昼と夜ができたということでした。

月読命は月の神であることから太陰暦に關係するため、暦の神ともされています。

# 春眠曉を覚えず

春曉

春眠不覚曉 处处聞啼鳥

夜来風雨声 花落知多少

「春眠曉を覚えず 处处啼鳥を聞く」  
しよしよていぢやう

夜来風雨やらいの声 花落はなつること知る  
多少」

春はぐっすり眠れるものだから、夜が明けたのに気づかず寝過ごしてしまつた。あちらこちらから鳥の鳴



き声が聞こえる。 昨晚は、風や雨の音がしていたが、花はどれくらい落ちてしまつただろう。

「春眠曉を覚えず」は、夜が明けて日が昇つても気がつかないほどに心地よく眠つてしまつていたという、うらかな春の気分の歌です。

この詩は、中国の詩人、孟浩然もうこうねんが詠んだ「春曉」という題名が付いた漢詩です。

孟浩然是、中国唐代の詩人です。彼が生きた時代は、日本では奈良時代にあたります。出世欲がなく、若い頃から各地を放浪しながら歌を詠んだ人であつたといわれます。

孟の生きた古代中国の役人は朝が早く、厳しい規律に縛られていました。そのような世俗の生活を揶揄して詠んだ歌なのかもしれません。

新年度が始まりました。出世欲があらうがなかるうが、寝坊なんかしてられません。

本宮所蔵品

## 青磁子持合子

直径八cmほど

の器の中に、直径二cmほどの皿が三つあり、そ



れぞれの間に筆を置くことができます。ようなものが取り付けられています。用途は不明です。この合子の裏には「承久三年正月十八日」の墨書があります。承久三年（一二二二）は、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げて敗れた「承久の変」のあつた年です。



今年こそは

待ちに待つたプロ野球が開幕しました。いつもなら、本拠地開幕戦に行つたのですが、昨年に続いて今年もテレビ観戦です。 昨年はコロナ過ということもあつて、変則日程となり、同一チームとの六連戦が組まれました。我がオリックス・バファローズは敵地での開幕戦で、まさかの六連敗。シーズンが終わつてしまいました。

今年も敵地での開幕戦は一勝二敗。そして迎えた本拠地開幕。相手は不足なしのソフトバンク・ホークス。開幕三連勝で京セラドームに乗り込んできました。

初戦はオリックスのまづい守備もあつて一対三の敗戦。第二戦は七対二で勝利。二勝三敗と、まずまずのスタートです。今年こそは三位をめざして頑張つてほしいものです。え？ 「優勝をめざす」の間違いだらうって？ いえいえ、そんな高望みはしません。

Instagram @goryohongu

Twitter @goryohongu




#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

# 十一代垂仁天皇(二)

別の説によると、はじめ、都怒我阿羅斯等は国にいたとき、黄牛に農具を負わせて田舎に行きました。ところが、黄牛が急にいなくなりました。それであとを追って行くと、足跡がある村の中に留まっていました。

一人の老人が言いました。「お前の探している牛はこの村の中に入った。村役人が言うのに、『牛が背負っていた物から考えると、殺して食べようとしているのだろう。もしその主がやってきたら、物で償いをしよう』と言って殺して食べてしまった。『牛の代価に何を望むか』と言われたら、財物を望むな。『村にお祀りしてある神を欲しい』と言いなさい」と言いました。しばらくして、村の役人が来て言いました。「牛の代価は何を望むか」

それで白い石を牛の代りもしました。それを持ち帰って寝屋の中に置きました。すると、石は美しい乙女になりました。阿羅斯等は大変喜んで交合しようとしたが、阿羅斯等がちょっと離れたすきに、娘は失せてしまいました。阿羅斯等は大変驚き、妻に尋ねました。妻は答えて「東の方に行きました」と言いました。

探して追って行くと、海を越えて日本国に入りました。探し求めた乙女は、難波に至って比売語曾社神となりました。また、豊国の国前郡に行つて、比売語曾社神となりました。この二箇所に祀られているといひます。三年春三月、新羅の王の子、天日槍が来しました。持ってきたのは、羽太の玉一つ、足高の玉一つ、鵜鹿鹿の赤石の玉一つ、出石(但馬国)の小刀一つ、出石の様ほこ一つ、日鏡一つ、熊の神籬一具、合せて七点でした。それを但馬国に納めて神宝としました。そして奉ったのは、葉細の珠、足高

の珠、鵜鹿鹿の赤石の珠、出石の刀子、出石の槍、日鏡、熊の神籬、胆狭浅の太刀、合せて八種類でした。

天皇は天日槍に「播磨国の宍粟邑と淡路島の出浅邑の二つに、汝の心のまに住みなさい」と言われました。

しかし天日槍は申し上げました。「私の住む所は、もし私の望みを許して頂けるなら、自ら諸国を巡り歩いて、私の心に適った所を選ばせて頂きたい」と言いました。

そのお許しがありました。そこで天日槍は宇治河を遡って、近江国の吾名邑に入つてしばらく住みました。近江から若狭国を経て、但馬国に至り居処を定めました。近江国の鏡邑の谷の陶人は、天日槍に従っていた者です。天日槍は但馬国の出石の人、太耳の娘である麻多鳥を娶つて、但馬諸助を生みました。諸助は但馬日椿杵を生みました。日椿杵は清彦を生みました。清彦は田道間守を生んだとされます。(次号につづく)

万葉の花たち

## しの(メダケ)

うち靡く春さり来れば 小竹の末に 尾羽うち触れて 鶯鳴くも

作者未詳(巻十一・一八三〇)

「春だ。篠竹の梢にとまって篠の梢に尾羽を打ち触れてウグイスが鳴いている。」



「しの」は「しなやか」からきています。「うち靡く」は春の枕詞で、それに呼応するかのよう、しなやかになびく「しの」が詠われています。植物の特性を巧みに詠み込んでいます。メダケは女竹で、マダケ(男竹)に對して小型であることを意味します。メダケは籠を編むのに使われました。「しの」はこの辺りでは「しのべ」と呼ばれ、子どもの頃はこれでスギ玉や紙玉鉄砲をよく作って遊びました。